

馬場ひでゆきの活動日誌

No.89

12月議会



松代病院無床診療所化は可決だが 馬場ら断固反対！

貴重な運動の成果を次に繋げる

12月議会では、県立松代病院を無床の診療所にすることを盛り込んだ条例改正案が賛成多数で可決されました。

私も、松代・松之山地域の皆さんの運動に連帯し、議場でも反対討論（裏面に掲載）をしました。しかしながら、地元住民の「病院残せ」の運動は、病院の存続こそ叶わなかったものの、次に繋がる成果を残しました。

●数の力で県を圧倒！

住民有志の「県立松代病院を守る会」が入院機能の存続を求

めた署名は1万6310筆になりました。凄いと思ったのは、地元の松代・松之山地域から住民の約7割の2740筆が集まったことです。松代病院が「地域に欠かせない病院」という訴えを署名数で裏付けました。

そして、11月15日の「大集会」では、地元を中心に200名が参加しました。松代・松之山地域の人口は約4000人です。仮に人口20万人の地域だとしたら、1万人が参加したことになります。凄い数だと思います。

●住民と医療従事者との共闘が実現

9月28日の県が主催した住民説明会では、松代病院に勤務する小堀浩一医師が「入院機能を持つからこそ、地元の医療や福祉従事者と連携して外来診療や在宅診療などの地域連携が可能になる。外来診療だけでは人員も削減されるから、これができなくなり、地域医療の基盤が崩れる」と発言しました。

集会で発言する小堀医師

小堀医師の現場からの発言は説得力があり、しかも身を賭しての発言は、多くの地元民を励ましてくれました。

●広がりを見せた「大集会」

11月15日の「大集会」では、小堀医師にお世話になった元患者さんたちが「いま生きてるのは先生のおかげだ。松代病院がなければ死んでいた」などと次々に発言しました。

過疎地病院として同じ課題を抱えている柿崎病院、津川病院の医療従事者も連帯の挨拶をしました。そして、某県議会議員の秘書も「父が松代に世話になっ

た。私も頑張る」と涙を流して発言されました。牧田正樹議員と私も参加して連帯のあいさつ、地元選出の小山大志議員（自民党）もメッセージを寄せました。

●住民の熱意が議員を動かす

牧田議員は、松代地域出身の議員として「守る会」が立ち上がる時点から住民とともに行動されました。妙高市選出の八木清美議員も、地元で県立妙高病院があることから、「他人事ではない」といつて反対の立場を明らかにしました。

議会では可決を阻止できなかったものの、「未来にいがた」9名「リベラル新潟」6名「真政にいがた」3名及び私の合計19名が議案に反対をしました。

※ 無床診療所化は決まったものの、受入れ先になる十日町病院では10人の看護師の欠員があり、十日町地域全体の4月以後の診療体制は万全ではありません。地元住民と医療福祉従事者との連帯で築き上げた団結力が、これからも同地域の地域医療を守る礎になるものと思います。



大集会には約200名が集まり、「病院残せ」をアピールしました。



私の推し本その28

サン＝テグジュペリ著（内藤濯訳）

『星の王子さま』（岩波書店）

私の場合、友だちとちょっとしたことで仲たがいをして口を聞かなくなったり、友だちとケンカ別れしたときに、いつも思い出したように読んでいます。

キツネと王子さまの会話の部分（第21章）がステキです。物語全体からすると僅かですが、作者の言いたいことすべて詰まっています。

ある日、王子さまはキツネと出会います。王子さまの「（仲良くするには）どうしたらいいの？」との問いかけに、キツネは「しんぼうが大事だよ」、一日一日少しずつ体を近づける、ちよいちよい横目で見ることが、なんにも言わない、「ことばっていうやつが勘違いのもとだから」と答えます。

キツネは、二人で仲良くなれば、何気なしに見てた麦畑も今までは違って見える、人がたくさんいたって、一人の友だちは世の中に一人しかいないものなんだと教えてくれます。そして、旅立つ王子さまに「かんじんなことは目には見えない」と言葉をかけます。有名な言葉ですよ。

たしかにキツネのいう通りですが、この言葉、仲のいいときは忘れます。友だちという関係を失って身に染みてわかる苦い言葉です。私はそんなことを繰り返してばかりです。



上越の農業・農村を考える会

12月21日は、市民プラザで「上越の農業・農村のこれからを、みんなで語り尽くそう」と地元で地元の皆さんと話をするといろいろな課題があることがわかります。新年に向けて気持ちを引き締めるといふ仕事納めの日の集会となりました。

また、名立ブナの森水力発電の設立が報告され、今後の協力支援をお願いしたいとの要望も出ました。

集会では、今年の豪雪時には大雪なのに、名立区では積雪量が海岸部（ほとんど降らない）中間部と山間部（上越市内でも積雪量が多い）の三つの地域で平均化されて、名立区が災害救助法の適用対象地域にならず、災害救助法の運用を見直してほしいとの要望がありました。

題した講演・意見交換会がありました。約40名が参加しました。上越農業映画祭のメンバーの天明さん、嶋谷さんらが企画されたものです。彼らの地道な取組が広がってきています。

新潟大学の伊藤享司助教は、柏崎市の石黒地区を紹介しました。人口減少が続いて高齢者ばかりだが、めちやくちや元気で、毎日総会ができるほどよく集まっているとのことでした。会場からは、「水を確保して、用水や川を維持管理するには人のいる集落が必要だ」との指摘がありました。農業を維持していくためには、農村を守っていく必要があることを再認識しました。



寒かったですけれど、熱気のこもった報告会になりました。

松代病院無床診療所化に対する反対討論

馬場 秀幸

（議論が拙速すぎる）

県が令和6年に策定した「県立病院経営強化プラン」は、松代病院を過疎地域でかかりつけ患者や回復期患者を受け入れる病院として評価している。それが半年余りで方針転換し、県は無床診療所化の方針を決定した。

無床診療所化の方針の発表も、昨年春の十日町市長選挙の後のことであり、病院問題が選挙の争点になることを避けていたのではないかとと思われる。

住民からは1万6千筆余の署名が集まった。松代・松之山地域の住民の約7割が署名をしている。11月15日の大集会には200名が参集した。参加者は口々に「松代病院に命を助けられた」と発言した。今からでも遅くない。無床診療所化の方針を撤回し、住民の声に真摯に耳を傾けるべきだ。

（県の論理は破綻）

県は、無床診療所化の理由として「小規模組織の限界」「人材不足」「救急受け入れ困難」を理由として挙げている。

しかし、松代病院に勤務する小堺浩一医師は、「今まで地域で築き上げた医療や介護従事者の方々と地域連携でスムーズな在宅復帰を可能にできた、入院機能が高くなれば、人員も削減され、在宅診療や地域連携もできなくなる、地域医療の基盤が崩れる」という。県の論理は机上の空論で破綻している。

（県の政策に一貫性がない）

県は「新潟棚田フォーラム」を開催して棚田の保全や地域の活性化、関係人口の拡大を推進している。しかし、本当に棚田を遺したいと思っているのか。

地域から病院機能がなくなれば、地域の過疎化に拍車がかかる。棚田を守る農業の担い手も益々減る。無床診療所化は、地域の活性化に逆行する。地域で生活をして農業を支える人がいなければ、関係人口も増えることはないだろう。

病床稼働率が低いと言われている。しかし、過疎地の病院に効率を求めるのはおかしい。松代病院は住民が頼りにし、病院スタッフがやる気をもって頑張っている活きた病院で、まさに「地域の宝」だ。拙速に事を進めるべきではない。

発行責任者：馬場ひでゆき事務所

住所 新潟県上越市本町3丁目3番3号

ダイアパレス高田弐番館2階

電話 025-546-7110

ファックス 025-546-7666

メール kengi-babahideyuki@wind.ocn.ne.jp